後期イスラム世界における紙と書物

鈴　木　　董

（東京大学東洋文化研究所教授）

本日は「後期イスラム世界における紙と書物」ということでお話しさせて頂きます。

イスラム世界というのは、アジア・アフリカ・ヨーロッパの 3 大陸にまたがる広大な世界で、そのうち私が専門にしておりますのは、オスマン帝国という国家で、地中海世界のうち、西欧に属する部分とモロッコを除く部分を版図に収め、これに東方ではアラビア半島とイラク、北方ではハンガリーと南ウクライナ、クリミア半島などまで包摂していた国家です。イスラムは 7 世紀の初頭にアラビア半島に現れますが、時代的には 13 世紀から 20 世紀初頭までということになります。後期イスラム世界というのは、モンゴルがバクダードを破壊し、アッバース朝が亡んだ 13 世紀半ばぐらいから、近代西欧の影響が決定的となる 18 世紀の末ぐらいまでのことを扱うと思っていただければよろしいかと存じます。

まず「イスラム世界とその広がり」というところから始めさせていただきます。「旧世界」のアジア、アフリカ、ヨーロッパの 3 大陸には、大体五つの大きな文化圏が併存していると言っていいと思われます。一つは西欧世界です。境がポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロベニア、クロアチア、ハンガリー、これが西欧世界の東の境です。ここは、ローマ字を使う世界で同時に、中世にはカトリックを奉じていて、ラテン語を文化語として使っており、今はラテン語は廃れましたがローマ字を使っているところです。ＥＵの第 1 次加盟国のうちギリシアを除いた部分と殆ど一致します。

この世界は西ローマ帝国の影響下に育ったところです。西欧キリスト教（カトリック・プロテスタント）世界、あるいはラテン文字世界といえると思います。その東隣、東ローマ帝国の影響下に育って、正教を奉じ、ギリシア文字かキリル文字を使っているところがあります。ギリシア・キリル文字圏、これは東欧正教世界と呼びましょう。この 2 つの世界は、と

もに中世には、インクで鵞ペンでものを書いています。カリグラフィーの名で「書道」というべきものが、一応ありますが、それほど発達しておりません。

さらに東のほうに行きますと、インドから東南アジアにつながるところでは、梵字系の文字を使っています。ここでは鉄筆のようなもので貝葉を削るようにものを書いています。鉄筆様のものでヤシの葉っぱに刻み込んでいるので、カリグラフィーはそれほど発達していません。料紙も限られているし、用具も限られています。

世界的に見て、非常に珍しいのが毛筆でものを書く漢字圏です。私の感じでは中国を中心にして、中、韓（韓国・朝鮮）、越（ヴェトナム）、琉（琉球）、日、これが漢字圏に属します。ここは墨を使って毛筆で書くということで、紙も筆で書くために、わりあい柔らかい紙に平気で書きます。ぼかしとかにじみとかも平気で、紙もわりあい柔らかい紙を使います。今日、われわれは洋紙と和紙と両方使い分けていますが、和紙のほうがずっと手ざわりが柔らかい。水を十分に吸い込む。そのかわり一度吸い込んだものは残ってもちがよい。洋紙のほうは固くて丈夫に見えるけれども、意外にもちが悪いということになります。

その間に、この四つの文化圏をつなぐ位置にあるのがイスラム圏です。この東欧と西欧、東西ローマ帝国の衣鉢を継いだ二つの世界、すなわちラテン文字圏とギリシア・キリル文字圏では、中世には鵞ペンとインクを主に使っている。今もペンとインクを使っている。しかしイスラム圏では書く材料としては墨、一種の墨汁のようなものを使います。しかし、書くときにはペンを使います。ただ、ペンが鵞ペンでなくて葦ペンです。まっすぐな葦をちょっと加工して、それを削りながら使います。

この三つの文字圏は、いずれも削りながら書くペンを使っているので、だんだん先が傷んでくると削ります。

大体こういう広がりの世界を舞台にしてお話をするとご承知おきいただきたいと思います。今日でも西から東へ、ラテン文字圏、ギリシア・キリル文字圏、梵字圏、漢字圏、そしてそれらをちょうどつなぐところにアラビア文字圏、すなわちイスラム圏が広がっていることになります。

位置から見ておわかりになるように、イスラム圏というのは前近代というか、15 世紀末に始まる西欧人の「大航海時代」以前のアジア、アフリカ、ヨーロッパ、そしてインド洋、地中海という 3 大陸、1 大洋、1 海ないしはシナ海も加えれば 2 海の世界でわりあい縮こまって暮らしていた時代の「陸のシルクロード」と「海のシルクロード」の中継ぎをしていた世界ということになります。そこをいろいろな文物が流れていきます。紙も、中国からイスラ

ム圏を通ってヨーロッパに流れます。

それからほかに、物騒なものでは火薬とか、平和にも使えるものでは羅針盤とか、やはり中国から、イスラム世界を通り、西欧世界に流れつくということになったわけです。

「旧世界」のアジア、アフリカ、ヨーロッパという 3 大陸をつなぐ陸と海の大動脈のうち、陸の大動脈の一つである「陸のシルクロード」は、イスラム世界をへて、より西方につらなっていました。「海のシルクロード」ともいわれる海の大動脈は、中国の南辺から発して、マラッカ海峡を通り抜けて、そしてインドに至り三つに分かれます。その一つはペルシア湾ルート、今のオイル・ルートです。それから紅海ルート、ちょっと前のスエズ・ルートです。そして東アフリカルートで、これはマダガスカルあたりまで下りてくる。このルートは「大航海時代」の先駆けとなった、ポルトガル人のヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰をこえてインド洋に入った後、インドに到達したルートでもあります。この海の大動脈、「海のシルクロード」とか「スパイス・ロード」、「香料の道」、あるいは「陶磁器の道」などと言われます。「絹の道」に対して「香料の道」と言われますが、これもイスラム世界を経由していた。イスラム世界とは、そういう位置にあった世界です。

この世界では、文明についての言葉としての文明語、文化について語る言葉としての文化語としてアラビア語が用いられました。これに対し「旧世界」の一番東では漢文、すなわち古典中国語を用いている。漢字を文字としては、少なくとも重用している。そして、単語として漢語を大量に入れています。

漢字圏のうち、ヴェトナムだけは、漢字風の字喃（チュノム）は作ったものの、固有の表音文字を創出しえず、フランスの植民地となったのでローマ字を使うようになってしまい、朝鮮半島では北朝鮮は漢字を廃止し、韓国でもおおむねハングル化してしまったので漢字の通用圏は減っていますが、中国及びその一部である台湾も漢字を使っていますし、日本も漢字を非常に多く使っている。これも特殊な文化圏です。

東アジアでは、漢字を使うためにカリグラフィーというか、書道が非常に発達しています。おそらく世界に二大書道圏があるとすれば、その一つは毛筆を使ってものを書く漢字圏です。もう一つが葦ペンを使ってものを書くイスラム圏であると言っていいと思います。ここではアラビア文字を用いる。漢文に当たるものがアラビア語であった。そして、アラブ人以外のムスリムも殆どが、文字としてはアラビア文字を使用するようになり、アラビア文字は表音文字で従来の文字との併用がない。従来の固有の文字ないしは新しく発明した文字とアラビア文字を併用するということがなくて、全部アラビア文字に切り替わります。ローマ字化と

同じです。

東アジアの場合は、土着の言葉、中国語以外のものを母語にしている人たちが、自分たちの言語を文字で表記しようとしたとき、韓国の場合には朝鮮王朝、日本でのいわゆる李氏朝鮮の世宗の時代、15 世紀半ばになってハングルを発明する。

日本の場合はずっと古く、平安朝時代に確立した形で平仮名、カタカナができるということになります。その場合に漢字・仮名文字、漢字・ハングルまじり文というのが書けますが、イスラム圏の場合は、全部アラビア文字で綴られています。表音文字の世界はいずれも同じと思います。イスラムの戒律上、絵が好まれないが、「コーラン」の写経が貴ばれるということで、イスラム圏では非常に書道が発達しまして、さまざまな書体が発達します。

かつてはアラビア文字圏というのは、相対的に自己完結的な一つの大文化圏、それを私は文化世界としばしば呼びますが、文化世界をかたちづくっている。国際関係もそれがベースになって、そこの内部の関係がベースになりつつ、その外の異教徒の諸世界との関係ができるということになります。イメージとしては中華システムに似ています。東アジアの華夷システムに似ていて、華夷システムは文明化した華と野蛮な夷との関係になりますが、イスラム世界では、世界をアッラーの最後の御使いである預言者ムハンマドの伝えた教えを奉ずる本当の信仰者としてのムスリムの世界と、唯一の正しい神の教えをまだ受け入れていない不信心者どもの世界という形で分けております。

このように、イスラム世界の広がりはアラビア文字の分布によって可視的に知ることができます。そしてそれは、相対的に自己完結的な世界を作っていたと思います。しかし、その後、西欧人の 15 世紀末に始まる大航海時代を経て、17、18 世紀に西欧人が原動力になって、5 大陸 3 大洋を結ぶグローバルシステムができていって、その他の諸世界は、その中に組み込まれて自己完結性が解体し、単一のグローバルシステムの中の一つの文化圏、サブ・システムになるということになりました。イスラム世界もその例にもれません。しかし、とはいえ、今でもかなり画然とした特徴を持った文化圏としてのイスラム圏たり続けていると思います。

そのサブ文化圏は、現在、物騒なほうではイスラム過激派、イスラム原理主義者の跳梁する世界、それが発生してくる世界ということになります。

このかつてのイスラム世界は、さらに南北に分けることができると存じます。南北に分けますと、その南半分は、かつてのローマ帝国の南半分＋アラビア半島＋イラクからなり、それは同時にアラビア語をしゃべるアラブ圏です。ここでは、ムスリムすなわちイスラム教徒

の文明語・文化語もアラビア語のみです。北半分では、様々の人々が各々の独自の言葉を話します。今日のトルコ共和国の国土の大半を占めるアナトリアの場合は、トルコ語圏、イランからアフガニスタン、タジキスタンあたりは大きく分けてペルシア語圏、それからさらに北方の中央アジアのほうにもトルコ系諸語圏があります。インドに入るとまた違った言語をしゃべっている人たちがいるという具合になります。ここで、このイスラム世界の北半分について言えば、イランを中心にして北は中央アジア、西はアナトリアの今のトルコ、そして東はパキスタン、北インド、バングラデシュのイスラム教徒たちの世界では、第一の文明語・文化語としてのアラビア語に加えて、ペルシア語が第二の文化語、文明語として用いられていました。そこでは、アラビア語とペルシア語を知っているうえに母語が使いこなせないと文人、知識人とは認められません。逆に「三つの言語に通暁している」と言うと大変な褒め言葉になります。そこは、アラビア語とペルシア語という二つ文化語・文明語を持っている世界です。

それは、近世後期以降のヨーロッパ、18 世紀ぐらい以降のヨーロッパに近いかもしれません。ギリシア語、ラテン語とフランス語が解らないと人間ではないという世界です。それに似ております。同時に、目で見える形ではタリーク体というイランから出てきた特殊なアラビア文字の書体が、イスラム世界の北半では少なくとも多くの書体の一つとして使われます。この書体は、イスラム世界の南半分には全く入りません。書かれた字の書体の分布でサブ文化圏の広がりがわかります。

これからのお話は、大体こういう広がりのところのお話でして、今度は時代的な区分に入らせていただきたいと思います。ご承知のように 7 世紀の初頭、アラビア半島のメッカという町にムハンマドという人物が現れ、この人が商人として成功した後に、中年になって瞑想を好むようになり、神の使いに選ばれたということを確信して、イスラムが始まりました。

ムハンマドはその後、故郷を追われてメッカからメディナに移り、ここを拠点に再起巻き返しを図り、ついにメッカを屈服させ、生前にアラビア半島のあらかたを手中にすることになったわけです。その際、メッカからメディナに移った年である 622 年の当時のアラビア半島の暦の 1 月 1 日がイスラム暦の 1 月 1 日ということになって、イスラム紀元はそこから勘定します。イスラム暦は純粋な太陰暦なもので 355 日ほどしかありませんので約 11 日ずれていて、季節と関係なく進行し、太陽暦でいくと 34、35 年で一回りいたします。

このイスラム世界には、発生以来 1400 年近い歴史がございますが、これがイスラム世界の成立です。ここから始まりまして、預言者ムハンマドの没後、7 世紀中葉から、さらにア

ラビア半島から東西に押し出して、西ではかつてのローマ帝国の南半分を席巻する。東ではササン朝ペルシアに属していたイラクとイランとアフガニスタンと中央アジアの一部を押さえ、さらに中央アジアに進出して、当時、非常に活発な王朝で東方から西方にずいぶん深く出てきていた唐の軍隊と751年に今のキルギス共和国の西半分のあたりに当たるところのタラス川の河畔で戦い、戦いには勝ったものの、それ以上は東進せずに止まります。イスラム世界は、751年のタラス河畔の戦い以降、11世紀の初めまで250年間ほどほとんど広がりません。11 世紀以降に第二の拡大の波が来まして、16 世紀ぐらいまでに今のイスラム世界の広がりが成立します。

ちなみにこの最初のアラブの拡大のときに手中にしたイベリア半島は、逆に 11 世紀の初めから1492年までの間にキリスト教徒の「レコンキスタ（再征服）」によって取り返されるということになり、その延長線上でいわゆる「大航海時代」が始まります。当時の西欧人の実力の範囲内で、陸を征服し尽くして、今度は海に出たのが「大航海時代」です。その先駆が、ポルトガル人とスペイン人です。

イスラム世界というのは1400年近い歴史がありますが、18世紀末から19世紀になって近代西欧を無視できなくなり、これに大いに学んで社会変革を遂げて西欧に対抗しようという時代に入ります。すなわち、日本でいえば幕末・明治に当たる時代に入ります。そこで、それ以前を「前近代」、それ以降を「近代」と呼びたいと存じます。

この前近代のイスラム世界をどう分けるかは難しいですが、イスラム教徒のアラブ人が、アラビア半島を出て、最初に創り上げた恒久的な大王朝がアッバース朝です。それは、750年から1258年にモンゴルによってバグダードが攻め落とされるまで続くということになり、このアッバース朝の滅亡を境にして前期、後期に分けることができるかと思います。そうすると前期が約550年、後期がそれから18世紀末までの550年ということになります。

前近代イスラム世界の歴史の後半の550年のうち500年間ぐらいと、そして近代に入ってさらに150年ぐらい存続したのがオスマン帝国で、本日の講演の基本的対象はこのオスマン帝国です。オスマン帝国はイスラム世界の、特に多数派のスンナ派の世界帝国的なものとして独自の存在を示す国家になりました。これを主に対象としてお話をしていきたいと思います。

このオスマン帝国というのは、トルコ系のムスリムが東ローマ帝国すなわちビサンツ帝国の東半であったアナトリアに11世紀の末から入り込んでおりまして、その中から13世紀の末にその西北端で立ち上げた国です。ビザンツ帝国の旧領を 15 世紀の間に完全に飲み尽く

し、16 世紀に入りイスラム世界の心臓部に入って、同時に地中海の 4 分の 3、すなわちローマ帝国の旧版図の 4 分の 3 を覆う大帝国になりました。そして、東ローマ帝国の都であるコンスタンティノポリスを 1453 年以降は帝都として、1922 年まで存続しました。

このオスマン帝国は、トルコ系ムスリムが立ち上げた国家ではありますけれども、トルコ民族国家というより、イスラム的世界帝国というべきものです。そして、その文化の基調は、トルコ的な伝統をどこかにたたえながら、しかしイスラム文化を基調にしたものになります。しかも、そのイスラム文化も、アラブ圏とイラン圏でやや基調が違っておりますが、むしろイランのイスラム文化の強い影響下に自国の文化を形成したといってよいかと存じます。

もちろんここでは、アラビア語を第一の文明語・文化語とするとともに、第二文化語・文明語はペルシア語でして、文事を語るにはペルシア語抜きでは語れないという世界です。そして、書体としても、ペルシア語に特有のタリーク体が入りまして、特に文学テキストはこれで書かれることになります。そこのエリート文化を、オスマン文化と一応名付けたいと存じます。

こうして、イスラム世界の拡がりと、その形成の歴史と、そしてその中でのオスマン帝国の位置づけについてふれたので、いよいよ、イスラム世界における書物と紙に入らせていただきたいと思います。オスマン帝国における書物とその素材と製作道具については、イスラム世界の伝統をそのまま継いでおります。

書物には、もっぱら手稿本が非常に長く用いられまして、印刷術をムスリムが採用するのは 18 世紀前半に至ってからです。日本語の写本という語はものを写したものというのと書いたものということであるとのことですから、自分の創作にかかる原本も写本と言っていいわけですから、それでいけば写本ということになりますが、西欧ですとマニュスクリプトといい、そのほうがむしろ手で書かれたものということで意味がはっきりするので、そのほうが事態がわかりやすいかと思いますが、マニュスクリプトの時代が長らく続きます。

書かれる用紙のほうですが、イスラム世界の原初には、紙はもちろんございません。預言者ムハンマドの時代に非常に重要なものを書くときは羊皮紙を用いる。エジプトに近いところはパピルスが多少入っています。ほかは木片とか石片とか陶片に書くということで、コーランも、そういう色々なものに書き散らされた預言者ムハンマドの言葉を拾い、また記憶の中にとどめていた人の記憶と合わせて後に結集されたと言われています。

しかし、「アラブの大征服」が 7 世紀の半ばから始まって、それが 7 世紀末から 8 世紀の初めに中央アジアに及びますと、中央アジアにすでに広がっていた紙とイスラム教徒が出会

うことになります。

象徴的伝説としては、751 年のアラブ・ムスリムのアッバース朝軍と唐軍とのタラス河畔の戦いで、唐の兵士たちが捕虜になり、そのうち一人が紙漉き工で、これが西方に製紙技術を伝えたということになっています。それはシンボリックな話で、おそらくそれ以前に中央アジアにアラブ･ムスリムの力が及んだときに紙と出会っていたのではないかと思われます。ただ、目立った歴史上の事件というと、本当にタラス河畔の戦いで、捕虜として紙漉き工が来たことがあったかもしれません。とにかく中国で生まれた紙が中央アジアに拡がっていて、その中央アジアの紙と出会って、ムスリムが紙をイスラム世界に持ち込むということになります。そして独自の紙を漉くようになってまいります。

その後、イスラム圏を通じて中世のヨーロッパに紙が入り、中世のヨーロッパも羊皮圏ですが、高価な羊皮紙は非常に特殊な文書にだけ使われるようになり、紙が普通に使われるようになっていきます。

オスマン時代、紙は自分のところでも作りますが、東方の紙も来ていて、写本の目録などを見ると用紙についての説明があり、サマルカンディとか、あるいはヒンドアーバーディという紙がありまして､インドからも中央アジアからも紙を輸入していたようです。それから、アラブ圏からも来ておりますが、アラブ圏の紙はあまり評判がよくありませんで、一番安い紙がダマスクス製の紙、ダマシュキーの紙であったと、16 世紀の芸術家列伝を書いたムスタファ・アリーという人が紙の種類を挙げるときに言っております。また、一番上等なのがヒンドアーバーディという紙で、インド製の紙だったと言っております。とにかく、東方産にも、さまざまな紙があります。

さらにヨーロッパで中世の後期に、紙の生産が盛んになり、とりわけまず、イタリアが中心になり､15 世紀になりますとヴェネツィアから大量に紙がオスマン帝国に入ってまいります。不思議なことにスルタンの勅令だとか、非常に上等な写本は、東洋紙に書かなくなり、ヴェネディクとオスマン朝の人々が呼ぶ、透かし入りのヴェネツィア紙に主に書くようになりました。

それに加えて 16 世紀になるとフランスでも紙作りが盛んになって、フランス紙も入ってきて競争になります。その後は、フランス紙とヴェネツィア紙の両方が競合し、だんだんフランス紙のほうが優勢になりながら推移していくことになりますが、洋紙は自分のところではとりあえずは作っておりません。西洋紙を作り出すのは、オスマン帝国内でムスリムによる最初の活版印刷が始まる 18 世紀の初めのことです。印刷所開設と同時に用紙製造工場も

プラントを入れ、洋紙製造を始め、イスラムの象徴である新月をかたどった自分のオリジナルの透かしを入れた紙を作り始めます。こうして、洋紙と東洋紙と両方が併用される時代が続きます。そして、19 世紀になると、洋紙が地元産ないしは東洋系の紙を圧倒していくということになってまいります。

筆は、先ほど申し上げましたように葦ペンで、葦ペンを削り葦ペンの先を尖らせるための筆切り小刀（カレム・トラシュ）、筆先を切る際に筆先をのせるためのマクターという筆切り台が必要です。そして、そういう一式の道具を入れるクグールという、筆箱もあります。

マクターという、筆先を整えるための筆切り台は、まん中のところに窪みがあって、そこにペンを載せて、一応粗削りをした葦ペンの先を載せて、先をプツッと切るのです。このとき、筆先を上手に切らないとうまく書けません。

まず先を削ってペンの形にして、先端をマクターできちんと斜に切った後で、ペン先の中心に縦に切れ目を入れて用います。筆先の真ん中の縦の切れ目は、水滴を保つためです。それで書き出します。そして、先が傷んでくると、いくらでも削っては書きついでいきます。

ただ、コーランだけは、少なくともトルコのムスリムたちが信じるところでは、一筆で書かないといけないというので、ジャワ筆（ジャヴァ・カレミ）という、竹はトルコにはございませんから、東南アジア方面から来た、細い硬い竹製の特殊な筆がありまして、これを用います。そうすると、この筆は先が非常に硬いので、コーラン 1 冊を一つの筆で書き終わることができます。今でもコーランの写本に使うために、信心深いムスリムの人たちはまだ在庫を持っているようでして、私の書道の師匠だった、ケマル・バタナイ先生も持っていて見せてくださったことがあります。

トルコ人がカレム・トラシュと呼んでいる筆切り刀は、なぎなた様の長い柄のついた小刀です。この刃は、洋式のものではなくて、向こうの太刀や小刀を作るための技術で作られたもので、非常に鋭利です。今では骨董品になっています。

トルコの場合は特に、1928 年にムスタファ・ケマル・アタテュルクがアラビア文字の使用を禁止してローマ字を使用するという、いわゆる「文字改革」を断行しました。その目的の一つは、教育のために難しいアラビア文字ではなくて簡易な表音文字を用いるということもあったのですが、もう一つの狙いは、アラビア文字を用いた初等教育にイスラム宗教関係者が密接に関係を持っていたので、その社会的影響力を絶つことであったのであろうと思います。

さらに、アラビア文字での出版を禁止することで、新たにはローマ字でしか印刷できない

ことになり出版統制もできる。イスラム的、伝統的なものの影響をできるだけ絞るために文字改革をやった。教育改革の道具であるとともに、同時にイデオロギー闘争の道具として二つの面を持った形で文字改革が行われたために、書道もすたれますし、用紙、用具もすたれてしまい、書道家も非常に減ってしまいました。このごろになって伝統芸術の復興ということで、やっと少し復活しかけております。

書くには墨を用います。ミュレッケプと呼ばれる墨は、ランプの油から出た煤を集めて乳鉢ですってアラビアゴムに加え、さらに、いくつか薬品を加えて、ねかしておいたものを使います。書くときにたくさんインクが来るとうまく書けないので、まだ精製する前の本当のおがくずのような、マユを解いただけの生絹の糸屑を墨壺の中に入れ、そこに適量の墨を入れて、そこから墨を取って書きます。その墨壺をオッカと申します。

墨壺、筆切り台、筆切り小刀、紙切りはさみで、これで一応一式そろっているという形です。

これら筆記用具を携帯するためには、矢立てにあたるディヴィットというものがありました。ディヴィットはペルシア語から来た言葉で、長方形の長い筒の一方の端の側面に墨壺がついたもので、筒の中に、筆切り台、筆切り小刀、筆を入れて帯にさして携帯します。オスマン朝では金でつくられたこのディヴィットは、文人の象徴です。ディヴィットは、大宰相のシンボルでもあったのですが、紙については、文字の輪郭のはっきりしていることを好みますので、紙にけばがあってはいけない。そこで柔らかい滑石などの道具を使ってよく表面を擦りまして、その上に卵白の溶いたもの、ないしはスターチの類を液状にしたものを塗って、ねかせます。この作業のことを、「紙にテルビエを与える」すなわち「紙をしつける」といいます。テルビエということばは、アラビア語で教育すること、しつけることを意味しており、紙についてもテルビエするといいます。

テルビエを施した紙の表面を円滑にするための材料をアハルといいまして、これを施した紙をアハルルの紙（アハルル・キャート）すなわち「アハルを施した紙」といいます。ですから、非常に略式だと何も施していない紙の上に書きますが、ややちゃんと書こうというときには必ずそのアハルを施した紙の上に書きます。

アハルを施しておいて便利なのは、これを施した紙の上で書くと、書き損じてもつばをつけてちょっと擦るとすぐ消えて、簡単に書き直しができます。気合よりは装飾性を重んずるために、書き直しを余りいとわないところがあるようで、書道家にとっては必ずしも恥ではないようです。もちろん、昔の書道家は一筆で書きましたが、ときに書き直すことがありま

す。その辺も、東アジアの漢字世界の書道とは非常に様子が違っております。

それから書物ですが、書物は原則としては冊子本でして、巻子本ではありません。巻子の形をとっているのは神秘主義教団、アラビア語でタリーカ、トルコ語でタリカートといいますが、これの長老たちの系図のようなものなどで、普通は冊子本です。

冊子本には普通の洋装に近い装丁のものと帙装のものがあり、基本的には帙装が中心です。外側は紙や布を張る場合もありますが、皮装が多く、そこに押し型で装飾を施します。豪華なものには、押し型で文様をつけるときに、金箔を施します。書物を置くときは、東アジアの本と同じように横に寝かしておきます。そこで、すぐ書名がわかるように、小口にちょいと、書名を書くこともあります。

書物の中の各頁には枠を施すことが多く、豪華本では周囲に装飾を施します。この装飾を、テズヒプと呼んでいます。このテズヒプは時代によって色とモチーフが変わってきますので、これで写本の時代が特定できます。次は書体と紙です。まず紙からいうと、西洋紙を上等な写本に使っていることが多いのですが、西洋紙には普通透かしがあり、写本の成立年代確定に透かしも役に立ちます。そうすると少なくとも写本が料紙そのものより古いわけがないというのがわかります。ただ、手の込んだ偽物を作るときは、その時代の紙を使いますから紙だけでは年代確定はできません。

写本の成立年代を推定するためには、それに加えて書体があって、同じ書体でも時と所により微妙に違います。さらに装飾について、その色とモチーフでもう一つ見る。そうすると、成立年代はかなり絞られてきます。

文人の書斎についていうと、文机があって、この上に矢立と筆切り台と筆切り小刀など、あるいは、それらがセットになっている文箱のようなものがあります。本棚には普通書物を横積みで置きます。書物の小口には書名が書いてあることが多いのです。

筆でものを書くときには卓上でも書きますが、アトマという画板がありまして、座って、膝を立てて、片膝上に画板を置いて、右端から左方に書いています。昔の人は、紙を持ち上げるだけで、日本で巻紙に書くようにスルスルと書いた人もおりましたが、少なくともトルコでは、これはできなくなってきています。

しかし、昔でも普通はアトマを置いて膝にのせて書いていました。経机に座って机上で書くよりは、そちらのほうがむしろ普通です。

今度は書体に話を移しましょう。もともとはエジプトの神聖文字、ヒエログリフが簡易化したものをもっと簡易化したシナイ文字というのがあり、それが北に流れてフェニキア文字

になり、さらに西に流れてギリシア文字になり、それからさらに西方に流れてラテン文字になった。北東のほうに流れてアラム文字となり、それがパフラヴィー文字になる。一説ではインドの梵字も、アラム文字が南に入って、それが梵字になったという説もありますが、インドの先生方の多くは認めないようです。エジプトの象形文字から、南東に入って、いくつかの別の形を経て、アラビア半島のアラブ人の間で落ち着いたのがアラビア文字です。預言者ムハンマドの頃は、アラビア文字の古い書体であるクーフィー体で書いています。トルコのイスタンブルのトプカプ宮殿には、第3代のカリフのウスマーンが自筆で書いた『コーラン』だと言われているものが所蔵されていますが、7 世紀半ばから後半の非常に古いクーフィー体で書かれた物です。

『コーラン』についていえば、スルス体という大きな扁額を書いたりするときの一種の楷書の大型版か、楷書に当たるナスヒーないしはトルコ語ではネスィフ体と言っている書体が用いられます。アラビア文字は長母音と子音しか書けないので、短母音は普通では表記できません。そこで、長母音だけでなく短母音も表記するために、母音符が用いられますが、母音符が書けないと正確に発音を記せないので、クーフィー体とスルス体、ナスヒー体などの書体には母音をつけることができます。そして、『コーラン』は、誤読を避けるために、母音符のつかない書体で書いてはいけないことになっています。

18 世紀末から使いだした書体としては、ルカー体があります。トルコ圏では行書のようなもので、普通にメモを書いたりするときはこれで書いていました。今でもアラブ人たちはメモを書いたりするときはこれで書きます。私もトルコに行っているとき、書道のタリーク体の大家のケマル・バタナイという先生がおられ、書道史にも出てくる方ですが、その方に入門しまして、とりあえず一番最初にこの行書をやれということで、3 年間ぐらいあったらやれるだろうというので教えていただいて、一応この行書については師範資格を持っております。免許にあたるものをアラビア語でイジャーザ、トルコ語でイジャーゼットといいますが、これをいただいておりまして、正式に師範の資格があります。しかし、講座を開いたことは、慶應大学で一度課外でやったことがあるきりです。

北イスラム世界での共通の文事にかかわる書体がアリーク体です。これはイラン起源で、非常に流麗で日本の書体でいえば、草体仮名のような感じです。

オスマン朝のお役所の人たちが勝手に偽物が作られないように使うようになった、ディーヴァーニー体（お役所体）というのもあります。徳川時代のお家流に当たるかと思います。幕府の文書などはお家流で書いていたわけですが、これは非常に特殊な書体です。スルタン

の詔勅などはこれで書きます。

装飾としては、テズヒプというものがあり、場合によって 1 ページ全部が装飾だけ、テズヒプだけで覆われているということがありますが、普通の写本にはこれはありません。せいぜい、巻頭などにテズヒプ様のものがついているぐらいです。

とりあえず、写本を作る材料である料紙や筆をはじめとする文具、そして文字についてお話しいたしましたが、今度は写本から活字本へというところに移らせていただきたいと思います。イスラム圏では長らく、もっぱら写本の世界で、印刷は発達しなかったのです。活版はもちろん、石版も木版も発達しません。それでは、オスマン朝の人々が、印刷とりわけ活版印刷という技術があることを知らなかったかというと、そうではありません。まだグーテンベルクが活版印刷術を発明してから半世紀もたっていないころですが、レコンキスタでイベリアを追い出されたユダヤ教徒たちがオスマン朝に亡命してきまして、活版印刷機を持ち込み、許可を求めて、許可を与えられ、ヘブライ文字の活版印刷所が 1492 年にはオスマン帝国内で発足します。

16 世紀の前半にはアルメニア人がアルメニア文字による印刷所開設願いを出して許可を受け、活版印刷所を開設します。17 世紀前半にはギリシア正教会の改革派が改革の一環としてイギリスから活版印刷機を入れて、ギリシア文字で印刷することの許可を得て印刷出版が始まります。

このように、オスマン朝の人々は、活版印刷術というのがあることはよく知っていまして、17 世紀の半ばのイブラヒム・ペチェヴィーという歴史家は、その史書のいわゆる『ペチェヴィー史』、そしてそれはスレイマン 1 世が即位した時から 17 世紀半ばまでのオスマン通史であり、逸話がいろいろと入っていて面白いのでも有名ですが、その中に「グーテンベルクというのがドイツにいて、これが非常に珍しい機械を見つけて、一刷りで何百冊も本ができる便利な機械を作って、それがマトバーというものだ」と書いているのです。このように、あることはよく知っていて、便利な機械だとは言っているのですが、使わなかったのです。

活版印刷術を使わなかった理由の一つは、やはり唯一神アッラーのお言葉である「コーラン」を書くためのアラビア文字が非常に神聖なものだと思っていて、それを扱うのに不信心者どもが発明したような技術を入れたくないというのが一つはあったかと思われます。それから、今度は手で書かれた写本の優雅さ、美しさは捨て難いというのがありましょう。それに加えてイスラム学院の学生たちの一番大きなアルバイトは写字生の仕事です。当時は本屋は写本しかないので注文すると、手で書き写して本を作るのですが、もし印刷をやるとアル

バイトがなくなって暴れるだろう。実際上いろいろ不平があるとデモをやるような人たちで、結構扱いにくかったので、それへの配慮もあって余計やりにくいというところがあったようです。

しかし、18 世紀の初めになって、西洋文化にある程度開かれた、後代に「チューリップ時代」と名付けられた時代が始まり、1726 年になってようやくハンガリー人の神学生出身でイスラム教徒になってオスマン朝に仕えたイブラヒム・ミュテフェッリカと、フランスに派遣されたオスマン大使イルミセキズ・チェレビィの息子のサイト・メフメト・エフィンディとが組んで活版印刷所の開設願いを出して、ようやく許可が出て、印刷機を西欧から入れ、ついでに製紙工場まで入れることにして、活版印刷所が開かれて印刷が始まります。ただ 18 点ほど印刷しただけで、あとは停滞してしまいます。この印刷所の出版物は、ミュテフェリッカ版と呼ばれて、イスラム圏のインキュナブラ本と言われています。これは東洋文化研究所に一そろいが入っています。

こうして、イスラム世界においてムスリムが経営してアラビア文字を使う活版印刷所が初めてそこで開かれることになったのです。ただ、18 世紀を通じて本当に限られた作品が印刷されただけで、本当の活版印刷による本づくりが盛んになるのは 19 世紀になってからです。

アラブ圏ではムハンマド・アリーがエジプトで改革をやっており、彼がカイロ近郊のブーラークというところに 19 世紀初頭に印刷所を開いた。ここから、二百数十冊印刷出版しまして、それがアラブ圏ではアラブのインキュナブラ本と言われています。出版書の多くは、アラビア語の本ですが、かなりの数のオスマン語の文献も刊行されています。

その後、19 世紀半ば過ぎると、「西洋化」による改革が進んだこともあって、大量に印刷が始まり、新聞雑誌も多く出るようになり、今日、近代の印刷文化につながることになったのです。

以上、簡単にイスラム世界における書物と紙とその紙を用いて書くためのさまざまな道具についてお話させていただきました。